© 星野 美智子

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報　　2005年5月

愛知万博　アルゼンチン館を見学して ..... 1
アルゼンチン経済の現況　経済危機の後で ..... 2
現代タンゴにおける「回帰」連載第1回 ..... 4
フォルクローレ　コスキン2005年 ..... 6
アルゼンチン便り　がんばれ大国アルゼンチン ..... 7
日本海海戦とアルゼンチン ..... 9
アルゼンチンサッカー　再びの栄光に向けて ..... 10
メルコスール観光振興事務所の開設 ..... 12
Resumen en Castellano ..... 15

# 愛知万博　アルゼンチン館を見学して

豊田　潤一

愛知万博が3月25日から9月25日まで“自然の叡智”をテーマに、大阪万博以来35年ぶりに日本で開かれている。

筆者もまだ開幕して日も浅い4月初めの一日、万博会場を見学した。お目当ては話題の企業パビリオンと海外から参加の120国のパビリオンを出来るだけ見ようというもので、特にメルコスールの中では唯一参加のアルゼンチン館に興味を持っていた。

企業パビリオンは先端技術や大型映像を駆使し話題性にも富んでおり、人気の高さから一時間以上の待ちが多く、結局日本館と三菱未来館のみしか見学出来なかったが、海外のパビリオンは待ちの時間は殆どないため　かなり見学出来た。

アルゼンチン館は北米、カナダ、メキシコ等の米州の国々が集まった“グローバルコモン2”というセクションにある。開幕前には例の如くアルゼンチン館は建設が

アルゼンチン館

遅れ、開幕に間にあるのか分からないという話であったが、これまた恒例通り開幕前日にきっちり完成に漕ぎつけ開幕に間に合わせたようだ。因みに隣のアンデス諸国連合のパビリオンはいまだ建設途中であった。

アルゼンチン館はシンプルなスタイルで正面入り口の上部にはイグアスの滝の絵が描かれている。中に入ると正面にスクリーンがあり、その前には円形のステージがあり、約20脚ぐらいの椅子がステージを囲んでいる。側面の壁にはパタゴニアを初めとするアルゼンチンの自然の写真が飾られ、見物客にアルゼンチンの自然の雄大さを印象付けている。毎日朝10時から夜の8時まで一時間ごとに約10分程度のアルゼンチンの自然と文化の映像で紹介し、その後ブエノスアイレスから来たタンゴダンサーのカップルPablo y Noeliaが迫力あるダンス（約10分）を披露しているとのことである。

このようなパーフォーマンスはどの外国のパビリオンにもないアトラクションで素晴らしい。

筆者も暫く前から席を取って待って見たが（見物客が多くなるので少し早くから待つほうが良い）、20分余りの映像とタンゴショウが終わると見物客から拍手が鳴り止まなかった。その後、タンゴダンサーとの写真撮影を行えるおまけのサービスもあり、本場のブエノスアイレスのタンゴハウスでもないようなサービスで見物人も大喜びであった。

若いダンサー（Pablo y Noelia）が「9月の閉会まで万博で働くということで大変嬉しい」と誇らしげに語っていたのが印象的であった。

7月11日は「アルゼンチンの日」と定められ、関係者により様々な企画も検討されているとのことです（3月31日付け当協会第20回月報ご参照）。

万博にお出での際は忘れずにアルゼンチン館をお立ちよりになり見学することをお薦めいたします。

（とよだ　じゅんいち、当協会常務理事）

タンゴダンス

# アルゼンチン経済の現況　経済危機の後で

小林　晋一郎

2001年12月に勃発した経済危機は未曾有の規模でアルゼンチン政治・経済・社会を直撃、公的債務の支払不能宣言（デフォルト）はその金額の大きさと公的債務が国債であることから、その解決は複雑で多大な困難が伴なった。漸く債務再編に目処がついた今年の2月、アルゼンチンを訪問し政府当局者や金融界の要人と面談する機会を持った。メディアでは報道されない現地の声をも交えて危機後の現状を報告しよう。

### (1) 勝ち組と負け組み

アルゼンチンの人たちと話すと勝ち組、負け組みが話題となる。アルゼンチンで経済政策の失敗で、経済危機の犠牲の負担が大きい階層と、負担が軽微な階層、さらに危機により利益を享受する階層が出現し、国民間での危機コストの公平な負担となっていない。過去の経済危機で、預金の国債への強制転換、米ドル預金の公定相場でのペソ転換、為替相場の切下げ、インフレなどで国民の中産階級以下の人たちは大きな犠牲を余儀なくされた。

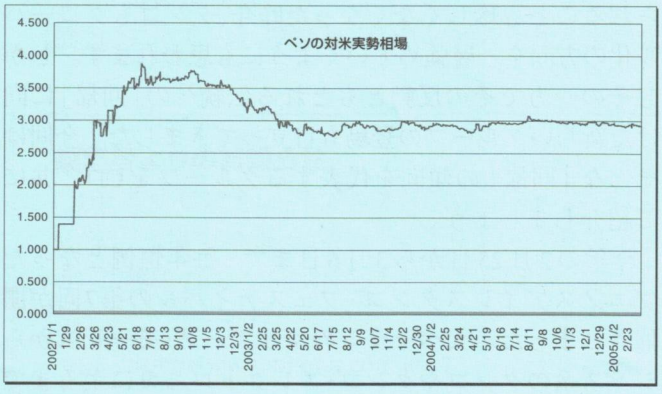
今回の勝ち組と負け組みを理解するために、経済危機収束の過程で採られた主要な施策を回顧してみよう。第1は、公的債務（国債で総額約818億ドル）のデフォルトだ。この対象には日本国内で発行された円建て国債、いわゆるサムライ債も含まれていて、アルゼンチン経済危機は日本人の家計にも影響しメディアを通じて茶の間の話題となった。第2は、通貨発行高を外貨準備の範囲内とし、中銀による1ペソ＝1米ドルでの交換を保証していた兌換制度の廃止と固定相場制から自由変動相場制への移行だ。この通貨・為替制度の変更でペソの対米相場は大幅に下落した（危機以降の対米ドル実勢相場の推移はグラフを参照）。第3は、預金の現金での引出し制限である。第4は、銀行の外貨預金・貸出のペソ化である。銀行ドル預金は1米ドル＝1.4ペソでペソ預金に転換、銀行ドル借入れは1米ドル＝1ペソでペソ借入れへの転換だ。第5は、民営化した公益事業で料金算定の為替相場・インフレにスライドするフォーミュラを政府が一方的に廃止し、公共料金をペソ建てで固定したことだ。これは政府と企業との契約の一方的な変更だ。

以上の説明から負け組みは自ずと明らかとなろう。先ず、説明するまでもなくアルゼンチン国債の保有者だ。次に、アルゼンチン国内の預金者で引出し制限、米ドル預金の強制ペソ転換で金融資産が目減りした。預金者はペソ化は財産権の侵害で違憲であると銀行を提訴、違憲との判決により預金者は銀行から米ドルでの預金支払い（実際には実勢為替相場でのペソでの支払い）を受領した。だが、最大の負け組みは銀行と民営化公益企業だ。ドル預金とドル貸付で異なった為替相場でペソ化した結果、銀行に為替差損が発生、政府は国債で銀行の損失を補填した。外銀や大手地場民間銀行や政府系銀行は信用力があるので海外からドル資金を借入れ、国内でドル貸付を行っていた。ペソ化で銀行貸出はペソ化したが銀行の負債である調達は外貨のまま残り巨額の為替差損が発生した。違憲判決による預金支払でも銀行に損失を齎した。最高裁判所は2004年10月、ペソ化はアルゼンチンの国家危機に際して採られた必要措置であり違憲でないとの見解を示した。ただ、この見解は提訴中あるいは既に違憲として出された裁判所命令を覆す効力はなく、未だ違憲提訴は銀行の隠れた損失として認識しなければならない。政府はこれらの損失を銀行に補填しない。銀行の損失が資本金を毀損し債務超過に転落するのを回避するために親銀行からの借入れは資本金に転換、あるいは一部免除などの措置を採った。地場銀行は海外の貸手銀行と債務再編の交渉を行った。外銀は巨額な資金投入を強いられ、アルゼンチンの金融市場に積極的に参入してきた外銀にとり金融市場としての魅力を失い経済危機以降、外銀の撤退が続出、撤退の流れは未だ終わっていない。もう一つの大きな負け組みの民営化公益企業は欧米系の多国籍企業が株主で信用力があること、料金算定が為替相場に連動していることから海外での資金調達を主としてきた。しかし、政府の一方的な契約変更で昨日の優良企業が対外債務支払不能に陥った。これら企業は政府を相手取り世銀の機関である国際紛争解決センターに仲介を要請している。損失に伴う請求金額は150億ドルと報じられている。

他方、勝ち組は外貨収入のある業界、輸出産業、観光業、外貨を海外で運用していた企業・個人だ。国内にて米ドルで借入れし、その資金を海外で運用した企業は国内のドル借入れは1米ドル＝1ペソでペソ化されたが、海外の金融資産はなんらの影響も受けず濡れ手に粟の利益を享受した。

### (2) 債務再編は終了しデフォルトから脱却したのか

デフォルト中の公的債務818億ドルの解決は、旧国債を新国債へ交換し債務を再編することだ。　新国債として、低い金利を適用し元本削減のない金利減免債（パーボンド、期日2038年）、元本66.3%の削減を行う元本削減債（ディスカウントボンド、期日2033年）、元本30.1%の削減を行う上に10年間の金利支払は現金で支払わず元本に組入れる金利元加債（クッシパーボンド、期日2045年）の3種類で、デフォルト中の国債保有者に対しいずれかを選択させた。債務再編の代理人はバンク・オブ・ニューヨーク（米）だが、応募受付は海外ではバークレイ（英）、UBS（スイス）、メリルリンチ（米）であり、国内ではBBVAフランセス、ガリシア、ナシオンで合計6行だ。交換申し込み開始は2005年1月14日、締切日は2月25日。政府の発表では債務再編への応募

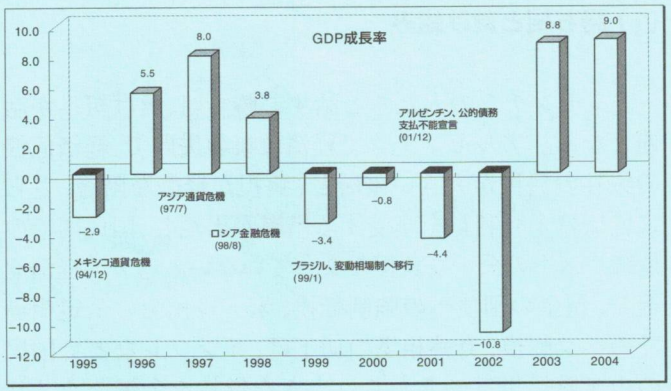


率は76.15%だ。サムライ債の個人投資家は交換前に機関投資家（証券会社など）に売却したと憶測される。

再編対象公的債務818億3600万ドルに対し、新国債への応募額は623億1800万ドルで、新国債の発行額は353億ドルと確定、名目の元本削減率は43%だ。交換に応募しなかった195億1800万ドルの旧国債保有者につき、「応募しなかったのは国債保有者の責任だ」、として政府は交渉しない方針だがこれを国際社会が受入れるだろうか。応募しなかった旧国債の再編にはアルゼンチンの法改正が必要だ。今回の債務再編でアルゼンチンはデフォルトを解消し公的債務は正常化したと言えるだろうか疑問だ。

### (3) 経済の現状とこれからの課題

好調な一次産品価格など外部要因もあり、経済成長率が2003年は前年のマイナスからプラスに転じ2004年は9.0%を記録した。金利の低下、為替相場の安定、株価の上昇、貿易収支と経常収支の黒字、財政収支の好転、失業率の低下、物価の安定、などマクロ指標は良好だ。しかし、投資家のアルゼンチンを見る眼は厳しい。エコノミスト誌（EIU）によるエマージング市場27ヶ国の投資順位で、アルゼンチンより下はイラク、ジンバブエだけだ。調査時点が債務再編前、やや古いデーターを使用しているので、現段階で調査すれば現在より上位になるだろう。投資家にとり魅力的な市場となり、持続的成長




を実現するための課題はなにか、項目を列挙しよう。①所有権の確立、契約の尊重など法的安定性の向上。②投資の促進。経済危機の間、投資が停滞し工場稼働率は限度に来ている。エネルギー危機も投資不足が原因だ。③今回の債務再編に応募しなかった国債保有者の取扱い。IMFのレビュウ再開。④民営化公益企業との契約変更・料金見直し交渉。⑤連邦政府と州政府の資金配分、⑥生産部門へ資金が配分されるよう銀行の金融仲介機能の回復。

これらの問題を解決し、変動の激しい経済から安定的持続的経済成長の軌道に乗ることを期待したい。

（こばやし　しんいちろう　当協会理事、
東京リサーチインターナショナル客員研究理事）

連載第1回

# 現代タンゴにおける「回帰」

谷本　雅世・西村　秀人

タンゴとテクノの融合「タンゴ・エレクトロニカ」がもてはやされ、ダンス・ショウのプログラムに取り入れられることも珍しくなくなった昨今、タンゴもグローバル化の方向を一層強めていくようにも思われます。しかしその一方でその反動ともとれる伝統への「回帰」に向けた新しいグループの登場も目立ってきました。今回はそんな「回帰」の傾向を代表するグループをCDと共にご紹介しましょう。

今年の2月25日から3月6日まで、毎年恒例となったブエノスアイレスタンゴ・フェスティバルの第7回が開催されました。大ベテランのマリアーノ・モーレスからジャズ系のタンゴやタンゴ・エレクトロニカに至るまでありとあらゆるタイプのアーティストが出演した中、若手のオルケスタ・ティピカの活躍が目立ちました。

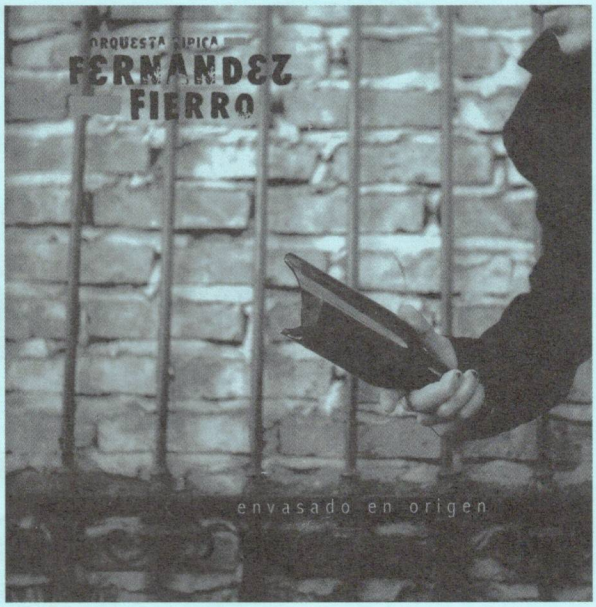
オルケスタ・フェルナンデス・フィエロ(Orq.Fernandez Fierro)は1998年の結成で、当時はフェルナンデス・ブランカ楽団と名乗っていましたが、2001年に改名。1940～50年代に全盛だったオルケスタ・ティピカの編成でオスバルド・プグリエーセのスタイルを継承しつつもレパートリーと編曲は独自のものを採用しています。CDはいずれも自主制作で　“Envasado en origen” “Destrucción Masiva” の2枚があります。去年3枚目のCDを計画していたはずですが、まだ発売にはなっていないようです。

オルケスタ・ティピカ・インペリアル (Orq. Tip. Imperial)も同世代のミュージシャンによるオルケスタで、やはりプグリエーセ・スタイルの延長戦上にあります。古典曲を中心に独自の路線を目指しています。CDは自主制作“La Maquina Tanguera”1枚だけですが、今後も大いに期待したいものです。

今回のフェスティバルには登場しなかったようですが、オルケスタ・ティピカ・ラ・フルカ (Orq.Tip.La Furca)もプグリエーセ・スタイルを標榜した若手のオルケスタです。演奏のまとまりという点ではまだフェルナンデス・フィエロとインペリアルの域には達していませんが、プグリエーセの取り上げなかったレパートリーで健闘しています。CD は SOCSA D.S.802 “De puro guapo”の1枚のみです。

ピアソラの後を継ぐ「ゼロ世代」の一人としてロックとタンゴの融合などを試みていた時期もあるバンドネオン奏者ロドルフォ・メデーロスは、最近かつての教え子を中心にオルケスタ・ティピカを編成して時折活動しています。CDはまだ出ていませんが、今回のフェスティバルでも野外で行われた大ミロンガ（ダンスパーティー）でトリをつとめたようです。

最近の若手のティピカはプグリエーセ・スタイルに偏る傾向がありますが、他にも1940年代のミゲル・カローおよびオスマル・マデルナのスタイルを忠実に再現しているオルケスタ・ティピカ・サン・スーシ(Orq.Tip.Sans Souci、CD は SOCSA D.S. )、ディサルリ・スタイルを継承するベテラン集団、オルケスタ・ヘンテ・デ・タンゴ(Orq.Gente de Tango、CD は自主制作で1枚のみ)、同じくディサルリのレパートリーを多く持つホアキン・アメナバルのオルケスタ・ティピカ (Joaquin Amenabar y su orq.tip.、CD は自主制作で “De la Guardia Vieja”)なども活動しています。このほかお馴染みフアン・ダリエンソ・スタイルの楽団もまだたくさん残っています。



オルケスタ・フェルナンデス・フィエロ

若手ミュージシャンから希望者を募り、入学試験を行ったうえで、ベテラン演奏家の指導の下、オルケスタ編成での演奏を経験させる学校のようなシステムを採用しているユニークな楽団、オルケスタ・エスクエラ・デ・タンゴ(Orq.Escuela de Tango)も順調に活動を続けており、今年も新入生の募集が行われたようです。このオルケスタにはアルゼンチン人だけではなく、アメリカ人、ベルギー人、日本人も参加したことがあり、タンゴ演奏の極意を学ぶ場として広く知られています。このオルケスタ出身の演奏家は近年のタンゴ界で中心的な活躍をしており、オルケスタ・エスクエラは見事に「学校」の機能を果たしているのが特筆すべき点でしょう。

オルケスタ・エスクエラ

このオルケスタ・エスクエラの最初のメンバーでもあったピアニスト、アンドレス・リネツキー率いるグループ「バレ・タンゴ」もタンゴの伝統の再生を目指す楽団です。

当初は四重奏としてスタートし、その後ショウ「ダンサ・マリーナ」に参加、八重奏で成功し、現在は六重奏団としてタンゲリーア「マデーロ・タンゴ」などで活躍中です。CD はすでに2枚出ていますが、このほど最新作を完成、まもなく発売の予定ですが、内容は古典タンゴ時代の大物作曲家アグスティン・バルディの作品集ということで、モダン派にも愛されてきた偉大な作曲家バルディの再評価につながる傑作になるのではないか、と期待されます。

（執筆：たにもと　まさよ、HPアルゼンチン、ブエノスアイレスの風運営）
（協力：にしむら　ひでと、ラテンアメリカ音楽研究）

**編集者よりのお知らせ**

HPアルゼンチン、「ブエノスアイレスの風」は近々、当協会のホームページにリンクされますが、ご興味のある方は下記アドレスを開いて下さい。

http://www.tanimon.com.ar/

# フォルクローレ　コスキン2005

佐藤　哲夫

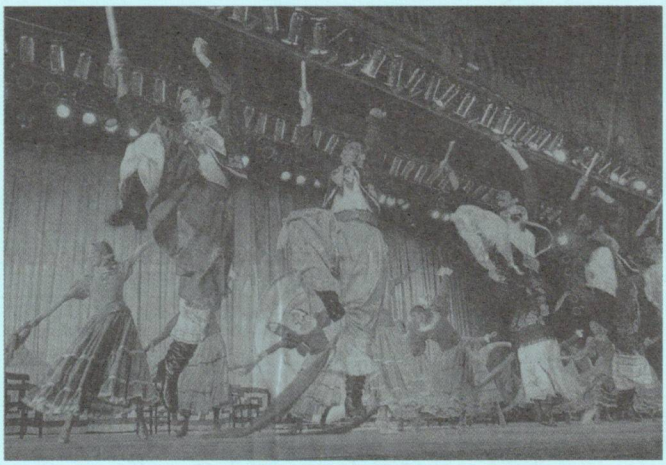
私とアルゼンチン・フォルクローレとの出会いは6年前、1999年に遡る。コルドバ州コスキン市で毎年1月中旬から9日間開催される南米最大のフォルクローレ音楽祭、その名も「コスキン祭」を訪れた。そこで大ベテラン歌手のメルセデス・ソーサや、当時人気上昇中の若手歌手ソレダーを生で聞く機会に恵まれ、歌い手と聴衆とが一体となったその熱い雰囲気に多いに感動した。オープニング・テーマでは約50人のダンサー達がアルゼンチン各地の代表的なリズムを次々と披露していく。その中でもアルゼンチン流カウボーイである「ガウチョ」の力強くかつ緻密な踊りに圧倒され完全に魅了された。帰国後の興奮冷めやらぬ中、偶然にも日本でフォルクローレダンスを踊るグループと出会い早速入門、今現在も仲間とともに踊り続けている。

そして2005年の今年、再びアルゼンチンへ行く機会に恵まれた。もちろんコスキンも再訪、その時の感動をここに伝えられればと思う。

夜、9時を知らせる高らかな鐘の音とともに、司会者がお決まりの開幕の一言、『Aqui, Cosquin!』（ここはコスキン、フォルクローレのメッカ）が町中に響き渡る。続いて先に紹介したオープニングの踊りが登場し、そこからは連夜多くの素晴らしいアーティスト達がステージに立ち、その熱演ぶりに私たち観客は酔いしれた。

今年はコスキン祭が始まって45周年だからなのか、会場の椅子が新しくなったり、低料金で入場できる席を設けたりと観客動員に力を入れているようだった。リニューアルされた会場で開催された8日間のステージにほぼ全て通い続けたが、景気が上向き気味ということも手伝ってか、連日連夜満員の大盛況だった。ここ数年の不況を乗り越えてフェスティバルが開催され続けた背景には、全国のフォルクローレファンや地元の人達の熱い思いと強い支持があったからだと改めて思わずにはいられない。

コスキン祭が始まる一週間ほど前に「プレ・コスキン」という、若手アーティストがコスキン祭出場枠獲得のオーディションがある。これに勝ち抜いたアーティストは大物歌手の合間に2曲演奏できる。彼らは必死だ。コスキン祭出場がきっかけで、有名になった歌手も多く、あのメルセデス・ソーサもこの舞台を経て有名になった。華やかな舞台の裏では多くの無名のアーティストたちがチャンスを探している。



*コスキン2005会場でのフォルクローレダンス*

今年も毎年出演する常連の個性豊かな歌手・グループが参加した。ここでアルゼンチンを代表する歌手を少し紹介したい：

ドイツ民謡を髣髴させる、リトラル地方「チャマメ」のリズムを歌い続けて数十年のベテラン女性歌手テレサ・パロディ。北部サルタ州から広くはボリビア南部に至るまで幅広いファンを持つエル・チャケーニョ・パラベシーノは、その歌いっぷりの良さがアルゼンチン版・小林旭と言ったところ。サンティアゴ・デル・エステーロ州からはロス・カラバハル、クッティ＆ロベルト・カラバハルのデュオ、ペテコ・カラバハルと、カラバハル一族の音楽は健在で、何十年も全く変わらぬ美しいコーラスによるチャカレーラのリズムを歌う。聴いているこちらはもう踊り出さずにはいられない程だ。前衛的フォルクローレの旗手として知られるビクトル・エレディアはメッセージ性の高い唄が70年代の苦しい軍政時代を乗り越えた中高年層から若者まで幅広い世代の心を惹きつけて止まない。ソレダーの人気は変わらず健在で、彼女も90年代半ばのデビューの頃は15歳そこそこだったはずだが、当時の少年ぽさは消え、大人の女性の魅力を兼ね備えた一人のアーティストに成長していた。

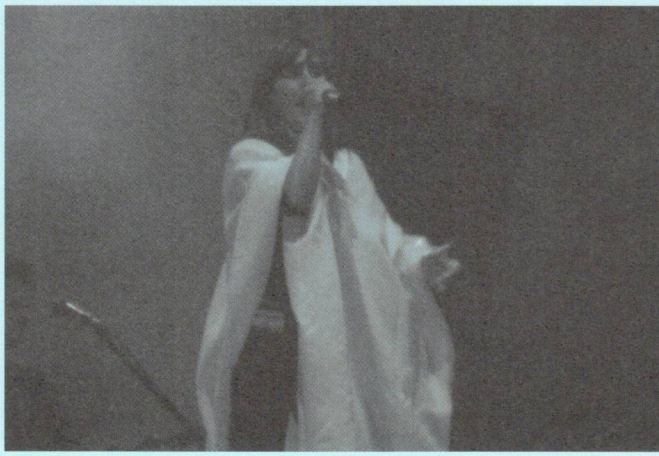
コスキンのもう一つの顔「ペーニャ」についても紹介したい。

「ペーニャ」とは昼間はカフェ、夜はライブハウスとなる店のこと。コスキン会場の周辺にはフェスティバルの期間中だけ人気アーティストの名前を冠してオープンするペーニャが立ち並ぶのだ。大体20人も入れば満員となる小さな店が若手アーティストの発掘、発表の場となり、連夜明け方まで賑わっている。

今回の訪問で何より強烈に印象に残ったのは、この「ペーニャ」での体験だ。

サンティアゴ・デル・エステーロ州出身のその男性グループは全くの無名にも拘らず、演奏はとにかく素晴らしいの一言だった。彼らがステージに登場するやいなや、それまでの静かでゆったりした空気は一変した。「チャカレーラ」のリズムが生まれた「サンティアゴの空気」を持ち込んだようにペーニャ全体が熱くなり、それに乗って客は若者も初老の夫婦もみんな踊り出した。それまでビデオを撮って何気に座っていた日本人(私)も思わず踊り出さずにはいられなくなり、流れの中に飛び込んだ。ペーニャの主催者、客、そしてアーティストらも飛び入りで踊った私を大歓迎してくれ、私はこういう瞬間のために生きているんだと実感した。そしてその魅力に取り付かれたように毎晩ペーニャへ通い、夜通し踊り明かした。

他にも伝えたいことは沢山あるが、アルゼンチン・



フォルクローレ歌手　ソレダー

フォルクローレに少しでも興味のある方は、まず、チャカレーラを聴いたり、踊りを実際にやって体で感じてもらった方が早い。CDはスタジオ録音とライブ盤とでは同じ曲でも全く違う雰囲気(スタジオ録音のほうがおとなしい)なので、踊るなら私はライブ盤を勧める。アルゼンチン・フォルクローレはほとんどが舞曲なので、踊れると本当に楽しい！皆さんとチャカレーラを踊る機会があればと願っている。

（さとう　てつお、フォルクローレ舞踊家・ダンサ・エレンシア　）

アルゼンチン便り

# がんばれ!! 大国 アルゼンチン

寺本　安久

97年の12月にアルゼンチンに赴任しました。早いもので7年が経過しました。私の体の血液の半分は、ワインです。

日本での生活リズム・パターンをすっかり忘れ、たまに出張で日本に帰るとせわしなさと縮こまり感が気になります。アルゼンチンは、豊かさ、大きさ、楽しさ・安さなどの点で、生活大国です。また、時間もゆっくり流れているように感じます。このすばらしい環境の中で、大変満足した生活を送っています。完全にアルゼンチン・ファンの一人になりました。

ご承知のように、アルゼンチンは、資源・エネルギー・食料・頭脳を持っている大国で（食料自給率240)、日本と比べると、泰然とし、国の骨格が大きく、大変な魅力と将来性があります。対日感情もよく、「もてない国」—日本にとっては、今後とも最大の魅力あるパートナーになり得るでしょう。

アルゼンチンは、今、経済リセッションを克服し、出口の見えない不安定な環境から脱し、よりよい方向に動き始めているように思います。また、これから、将来の国家ビジョンをどうしていくかという議論が出来る入り口まで来ているように感じています。

### 今回の債務騒動に一言

今風に、アルゼンチン国を定義すると経済テロ国家と言う方もおられるかもしれません。しかし、今回、アル

ゼンチンは、「債務問題解決がうまくいかねば、明日は無く、国家は破滅する」との壮絶な思いで、死力をつくして臨んだのではないか。その思いと覚悟・勇気が、いろいろと言われている中でも、全体としては、奏功を導いたと思っています。勿論、今回のことにアルゼンチンが最終的に勝利するかどうかは、いまだ判定を待たねばなりませんが、いずれにしても、この戦争のようなことが起こった後、何をどのように処理するかで、アルゼンチン国の将来が決まるのではないか！そう思っています。アルゼンチンのこれまでの歴史上、最大の山場であり、一方大きなチャンスでもあると思います。この正念場の事態をアルゼンチンはよくわかっていると思いますし、短期的な感情や利益に流されず、深い洞察力と長期的な視点にたって日本始め世界がアルゼンチン大国のことを思い、一致協力した前向きの対応をとってくれたらと思っています。

## これからのアルゼンチン：老害国家から若者国家へのシフト

1,000年続いたローマ帝国を滅亡させた大きな原因が、政治の不安定化であったように、政治の安定化は、国家の最重要課題であり、アルゼンチンにとっても同じでしょう。相変わらず、古い人間が政治をこねくり回している実態から離脱すべき時が来ていると思います。ペロニスタ主導体制は、金属疲労を起こしており、歴史が証明しているように、一国家が、長年にわたって、同じ精神を健康的に引き継ぐことは難しいと思うからです。

しかし、現実の解は、短期間で政治の改変・刷新は難しいが、10年程度をスパンとして考えれば、古い政治家におさらばしてもらい、若いリーダーの台頭を実現化させることは、十分可能で期待できるのではないでしょうか。現在30－45歳の若い優秀な人材は、たくさんいるように思います。仕事主義の政治体制さえ出来れば、楽天主義でプラス思考のアルゼンチンの若者は、途方も無いことをやりとげ、新しい国家路線の舵取りをしていく力があると思います。

一つのアイデアとして、若者参加型の政治にモデル・シフトさせることです。手始めとして、若者主体のシャドー・キャビネット作りを行う。青年経団連や、青年ジャーナリスト会など、政治サポート部隊も作る。いろいろな議論を行わせ、最終的には、若者版アルゼンチン国家戦略ピクチャーを取りまとめる。日本を含めて世界諸国・関係機関が、早い立ち上がりと若者たちがリーダー・シップを取りやすくするように、きっかけや環境整備の支援・協力をする。老害国家から若者国家への変身は、一度動きだすと、若者のスピードは、速い。10年もかからず、新しいアルゼンチン国家が数年で誕生するかもしれません。

司馬遼太郎の「坂の上に浮かんだ雲を目指して、その雲に引かれて登っていく若者たち」（坂の上の雲より）と同様に、アルゼンチン若者のスピリット・パッションに大いに期待をしたいと思います。

## NEC アルゼンチンのビジネス・モデル：アルゼンチンの若者パワーを生かす経営モデル

アルゼンチンの資産の一つとして頭脳があると述べましたが、NECアルゼンチンは、平均年齢28歳の革新的なその頭脳に助けられています。3年前に、サンルイス州と電子政府プロジェクトを約35億円で契約しました。このプロジェクトには、通信設備・データーセンター・電子政府関連のアプリ・ソフト（教育・病院・セキュリティなど）が含まれていますが、この案件を全てアルゼンチンの若者の手で仕上げることに成功しました。昨年11月、永井大使にご臨席賜り、完成式セレモニーを行いました。

現在、NECアルゼンチンは、従業員250名の会社ですが、60名のソフト開発技術者が働いています。彼らは、NEC本社からサポート・助言を受けるだけで、納入に必要なアプリ・ソフトを自らの手で設計・開発・生産を実行・完遂させました。この種の複合的なかつ大規模なプロジェクトをNECの海外現地法人が独力で責任を持って対応できたのは、初めてのことですが、やはり、アルゼンチンの若者の優秀性によるところが大です。ソフト開発という仕事は、自由闊達な洗練されたアイデアをもとに個人の能力を最大限生かす必要があるので、個人主義的なアルゼンチン人には、ぴったりとはまる仕事なのでしょう。モラルも高く、鋭い観察力と洞察力は、米国以上と評価しています。アルゼンチンの若者パワーのよさをうまく経営に活用出来た実例と言えます。

この電子政府のプロジェクトは、アルゼンチン発のビジネス・モデルとして、NEC本社側にも認められ、中

プエルト・マデロの焼肉レストラン

南米近隣諸国に水平展開が可能になりました。中南米各国の国家近代化（行政サービスの向上やデジタル・デバイドの解消など）に少なからず役立つものと期待しています．

最後に、人間一人一人に長所・短所があるように、国家・国民も同じと思います。アルゼンチンらしい長所を伸ばしながら、アルゼンチン大国に、おおいに挑戦してほしいと願っています。

（てらもと　やすひさ、NEC アルゼンチン）

*NEC 電子政府完成式*

# 日本海海戦とアルゼンチン

河崎　勳

5月27日、28日は、日露戦争で日本の聯合艦隊がロシアのバルチック艦隊を対馬沖に沈めた日である。この歴史の重要な一こまにアルゼンチンが登場している。

100年前、正確に言えば101年前の1904年1月9日、イタリア北部の造船所から2隻の大型巡洋艦が静かに滑り出して地中海に入った。艦尾には日本の軍艦旗を掲げている。軍艦の名前は、「日進」と「春日」。このあと日本海海戦で大活躍することになるのである。しかし、この2隻がなぜイタリアにいたのか。

*日本海海戦著書の表紙*

歴史には、生物の突然変異のような動きはない。一つのことが次のことを生み、タテの脈略はきちんとついている。しかしヨコのつながりは、時としてまるで無関係同士がと思われる展開を見せることがある。

極東では、帝政ロシアが、旅順に強固な要塞と海軍基地を作り上げ、強力な陸軍を満州に居座らせ、着々と南下政策を進めていた。新興国の日本はロシアの出方に国家存亡の危機を感じており、両者の衝突は不可避のコースをたどっていた。

軍備の劣る日本としては、どうしても日本海の制海権を握らなければならない。そのための軍艦が足りない。

この少し前、日露の争いとはまるで関係のない南米では、アルゼンチンとチリが、アンデスの境界線を巡って紛争を続け、両国は建艦競争に入っていた。アルゼンチンは、イタリアの造船所に2隻の大型巡洋艦を発注していた。アルゼンチン側は、バルパライソの沖合いからチリの首都サンティアゴを砲撃する、チリは、大西洋沖からブエノスアイレスに砲撃を加えるという前提で造っていた船であるから、当時の巡洋艦としては主砲の射程距離は世界一である。ここで、実力者の大英帝国が登場する。アルゼンチンとチリの間に分け入って和解協定に調印させた。建造中の軍艦も含めて海軍力を削減するという付属協定がついている。アルゼンチン、チリともに建造中の軍艦を早急に処分しなければならなくなった。

イギリスの造船所で造っていたチリの軍艦は、イギリスがさっさと買い上げた。イタリアで建造中のアルゼンチン艦2隻は、ロシアと日本の取り合いになった。が、結局日本が取得することになった。イギリスは、この2年前日本と日英同盟を結んでいる。そして、アルゼンチ

ンとイギリスは、投資と食料供給で結ばれた友好国である。こうして見ると、歴史のヨコの広がりも、このケースは、きちんと脈略が合っているのだろうか。

日本が買った2隻は、性能は素晴らしいものの何しろ新造艦で戦闘能力が整備されていない。ロシア艦隊の存在に怯えながらやっとの思いでイタリアから日本に向けて回航された。海軍部内で「智謀沸くがごとし」と言われた東郷聯合艦隊の秋山真之作戦参謀は後年、「あの2隻が日本海海戦の時にいなかったらと思うと、今でも戦慄を感じる」と述懐している。

この2隻がイタリアで建造されている時、監督官として滞在していたのが、アルゼンチンのドメック・ガルシア大佐である。祖国のために手塩にかけた2隻が、突然日本に売却され、日本の軍艦旗を掲げて港から出て行くのを見送った大佐の心中はいかばかりであったか。

この後大佐は、日露海戦で、「日進」に観戦武官として乗り組み、弾雨の中で海戦の一部始終を記録した。そのあとも、日本にとどまり、精力的に資料を集め、日本の勝因を緻密に分析して本国に大部の報告書を送った。報告書は、日本人の規律、教育熱心、周到な戦争準備、訓練、軍人の士気の高さなどをロシアと比較している。

この報告書を原著として、日本アルゼンチン協会が企画・制作し、発売されたばかりの「日本海海戦から100年～アルゼンチン海軍観戦武官の証言」は、海戦のことだけではなく、上のようなことも詳細に記述している。

日露戦争から学ぶべきことは多い。明治の人たちの士気と規律は、われわれを勇気づける。一方、教訓は、このあとの日本が、日本海海戦の勝利に酔い過ぎてしまったことであろう。あの日のZ旗を忘れずに、大艦中心の戦力を維持して行こうという主張である。

陸軍が奉天の大会戦でロシアの大軍を破ったあと、現地の児玉源太郎将軍は、「これ以上戦線が伸び切っては補給も人命もたいへんだ。国としてもコストに耐え切れなくなる」と、必死に戦争終結を政府指導者に訴えた。海軍でも加藤友三郎提督のように、「軍艦建造のために国家財政を圧迫するほどの金はかけられない。国際協調で国の安全を守ろう」という考え方があった。しかし、このようなコストマインドや外交感覚は、次第に荒々しい声に押される。先人の教えを学び取れなかった日本は、もちろんそれだけが理由ではないが、一つ一つ太平洋戦争へという歴史のコースを歩き出したのである。

（かわさき　いさお、ジャーナリスト・当協会常務理事）

**編集者よりのお知らせ**

「日本海海戦から100年～アルゼンチン海軍観戦武官の証言」は300頁の上製本。定価2,940円ですが、当協会会員は2,600円、送料無料で購入できます。

お申し込みは協会事務局へ。

アルゼンチン・サッカー

# 再びの栄光に向けて

北山　朝徳

2001年末の社会的動乱と経済の混乱という現状を忘れ去ろうとした国民の唯一の希望と期待は、2002年6月の日韓・ワールドカップでのアルゼンチン代表チームの優勝でありました。世界中のフットボール・ファンと殆どのマスコミも、アルゼンチンをチャンピオン候補筆頭にしたのですから当然でありました。

その唯一の希望と期待が、「予選リーグ敗退」で無残にも裏切られたことが未だアルゼンチン国民の脳裏から消え去っていません。

しかも、その敗軍の将であったビエルサ監督とコーチング・スタッフが、2006ワールドカップ・ドイツ大会

リケルメ選手

に向けて指揮を取ることになり、ア国民の怒りは、更に増長することになりました。

## 2006 ドイツW杯南米予選

そのような状況下、ビエルサ監督の最大の課題は、2003年九月から開始する2006W杯ドイツ大会南米予選突破と2004年八月のオリンピック（A代表監督と兼務）アテネ大会出場と栄冠獲得でした。

2002年W杯出場プレーヤーから七、八人ほどを残して、台頭して来た若手のプレーヤーを招集し、オリンピック代表（23才以下）も兼ねることができるような陣容でチームを組織化しました。監督が求める選手の特徴は、スピード、テクニックと、攻撃的なフットボールに適合出来る資質を持つことでした。

これはアルゼンチンのファン気質に合い、マスコミから好感を持たれていたことは確かな事実でしたが、2002W杯の予選敗退という結果に対する恨みと攻撃的フットボールの楽しさを相殺するには至りませんでした。

代表に招集されたのは、アジャラ（DF）、サネッティ（DF）達ベテラン数名以外、20才代の台頭著しい若手プレーヤーでした。2001年のワールドユース大会で突如に出現して、世界にインパクトを与えたダレサンドロ（MF）同僚だったマチェラーノ（MF）‘ルーチョ’ゴンサーレス（MF）達、リーベル・クラブ組の他、ビエルサの出身地ロサリオ市のニューウエルスに所属していたセッサール・デルガード（FW）やルシアーノ・フィゲロア（FW）達でした。既にスペインに移籍してプレーをし、有名所属クラブで活躍していたサビオラ、マイマール、ソリン等も代表常連となってゆきました。

南米フットボール連盟10ヵ国のW杯予選は、03年9月～05年10月まで総当り戦で行われるのですが、ここ10年近く、ブラジルとアルゼンチン以外の各国代表チームの戦力均衡は顕著となっており、4.5枠を巡って熾烈な戦いが繰り返されています。二年間という長い期間を戦うことは、プレーヤーの招集、個々のプレーヤーの状態把握、所属クラブとの調整など、解決しなければならない課題を多く抱えることになっています。特に殆どの主力プレーヤーが国外のクラブにいるブラジルやアルゼンチン代表には。

2004年の課題は、W杯予選七試合、7月の「南米選手権」そして八月のアテネオリンピック（23才以下＋三名年齢枠外・代表チーム）と代表チームに数多くのイベントがありました。

## 2004年南米選手権準優勝

南米選手権では、翌月のオリンピックに向けて、23才以下のオリンピック出場可能なプレーヤーを多用したビエルサ監督でした。

コロチニ、クレメンテ（DF）マチェラノ、メディナ、ダレサンドロ、ルイス・ゴンザレス（MF）、サビオラ、デルガード、フィゲロア、ボカの大スターでトヨタ・カップでも活躍した19才のテーヴェス、ロサーレス（FW）などが招集されました。勿論、オリンピックで年齢枠外の三名となるアジャーラ、ヘインセ（DF、二人とも）とキリ・ゴンザーレス（FW）もレギュラーとして加わっておりました。この大会は、予想通りにブラジルとアルゼンチンの二強の決勝となり、2－2の引き分けとなる大接戦でしたが、PK戦で4－2の結果、第41回「南米選手権」ブラジルが七回目の優勝を飾りアルゼンチンは準優勝で幕を閉じました。（アルゼンチン；14回、ウルグアイ；14回、パラグアイ＆ペルー；二回、一回優勝がコロンビアとボリビア）

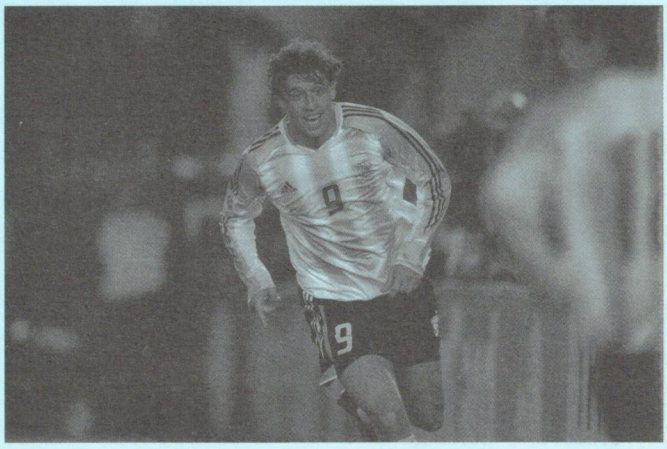
## 2004年アテネ・オリンピック優勝

アテネ・オリンピックには、南米のフットボール二大強国の一つ、ブラジルが予選敗退し、アルゼンチンとパラグアイが出場しました。

歴代のオリンピックでは、アマチュア時代の1924年と28年にウルグアイが優勝したのみの南米でした。84年と88年にブラジルは準優勝し、2000年大会でア代表も準優勝して（1928年、準優勝）、オリンピックの優勝はア国全ての悲願となっていました。

若手とベテランを上手く組み合わせ戦ったビエルサ・アルゼンチン代表は、遂に念願のオリンピック初優勝を飾って凱旋しました。

ところが誰もが予想だにしなかったことが起こりました。優勝監督となったビエルサの突然の辞任でした。漸く祝福される舞台が整った時を迎えたのに、アルゼンチン人全てがこの辞任に驚愕しました。騒然とした一時を経て、ア協会が発表した後任監督はホセ・ペッケルマンでした。オリンピック終了の翌月に、W杯予選に即座に臨まなければならなかったからです。



クレスポ選手

1995年のカタール・ワールドユース大会、97年のマレーシア大会、2001年のアルゼンチン大会と三回のユース代表チームをチャンピオンに導いた監督を務めて　実績は申し分ないペッケルマンです。

2004年の予選四試合にペッケルマンが招集したプレーヤーは、ビエルサ監督時代と殆ど同じプレーヤーで編成して臨み、これを無難な結果を示したことで安堵されるようになったのです。

2005年3月のリーベル・スタジアムでの第13節では、90年代に入ってその実力を飛躍的に向上させたコロンビア戦で、ACミランで復活したクレスポ、代表に欠かせないサビオラ、ソリン、アジャラ、次代のスターと云われるマチェラノ等の常連組とリケルメがレギュラーとなって1－0の勝利、南米予選トップの地位を確実にしました。

残り五試合、勝ち点3で予選突破を確実にすることで、アルゼンチン人全てをホッとさせています。但し、「ドイツW杯では、チャンピオン候補である」と云う声は、ア国の何処からも出ておりません。なぜなら縁起を担ぐのが国民性の一つであるアルゼンチン人、2002年日韓W杯での屈辱、悲劇の再現を恐れ、その亡霊から逃れたいのです。

ペッケルマンが監督に就任して以来、代表の声がでなくなった2002年の中心プレーヤーだったベロン、負傷に悩むアイマール、レアル・マドリッドでDFの地位を不動にしているサムエル、ベテランのキリ・ゴンサーレス達、そして今年初頭にライバル国ブラジルの最大の人気チーム、コリンチャンスに劇的に移籍をして大活躍し、既にチームの中心、アイドルになっているテーヴェスも再びの招集を期待して、それぞれのクラブで活躍することになっています。

86年～90年代の栄光の時代再現を胸の奥深くに、悲願として秘めているのがアルゼンチン国民全員である今日この頃です。

（きたやま　とものり、在アルゼンチン　トーシングループ代表、日本サッカー協会南米代表）

TOSHIN TOURS SRL
AGENCIA DE VIAJES Y TURISMO

*信頼と安心のネットワーク、あなたの個性に合わせた旅をレイアウト致します。*

**東進ツアーのサービス内容**

- 航空券の予約（国内.海外線）
- 長距離バスの予約（国内.隣国）
- ホテルの予約（国内.海外）
- パッケージ旅行の手配
- 市内観光.タンゴショー.エスタンシア日本語.英語ガイド（レギュウラー.プライベート）
- 送迎サービス（西語.日本語運転手）

お問い合わせ：　Av.Juan de Garay 2281
1256-Buenos Aires-Argentina
Tel.: (54-11) 4941-4700
Fax: (54-11) 4943-4276
mail: tours@toshingroup.com
web-site:www.toshingroup.com

担当：　堀内クステイーナ
水田リラ

# メルコスール観光振興事務局の開設

斉木　茂治

本年4月18日に日本で初めてのメルコスール観光振興事務局が東京の銀座に開設されました。住所は東京都中央区銀座5－15－1　南海東京ビルデイング8階で、地下鉄日比谷線東銀座駅徒歩1分（同駅6番出口からビルに繋がっています）、晴海通りに面し歌舞伎座の向かいと言う分かり易い場所にあります。

連絡先は；

TEL: 03-5565-7591　FAX : 03-5565-7593　E-mail: merucosur@mercosur.jp です。

本事務所にはブラジル（事務所長）、アルゼンチン、パラグアイ本国から派遣された専門家が常駐しますが、日本人スタッフの里見さん、安本さんが親切に応対して呉れます。

また、事務局のホームページも開設済で、アドレスはhttp://mercosur.jp です。メルコスール4ケ国の豊富な観光情報が写真入りで載っていますので是非開いて見て下さい。

*JICA パンフレット表紙*

本プロジェクトにつきましては、週刊トラベル・ジャーナル誌3月21日号に特集が組まれていますが、同誌の了解を得て筆者なりにその要旨を纏めてみましたので下記に紹介します。

**メルコスールとは；**

メルコスールはスペイン語でMercado Comun del Surポルトガル語でMercado Comun do Sulの頭文字をとった略称であり、日本では通常「南米南部共同市場」と訳されている南米地域経済統合体のことです。

メルコスールは域内関税の撤廃と域外統一関税を目指した関税同盟として1995年にアルゼンチン、ブラジル、ウルグアイ、パラグアイ4ヶ国を加盟国として結成され、現在はチリ、ボリビアが域内関税撤廃の部分のみに参加する準加盟国で、さらにペルー、ベネズエラ、エクアドル、コロンビアも準加盟することで合意しています。

名称が示す如く、最終的な統合の姿は貿易自由化だけでなく、労働や資本といった生産要素の移動まで自由化する共同市場を目指しています。

**メルコスール観光振興プロジェクトとは；**

日本のODA史50年の歴史において初めて国際協力機構（JICA）が観光振興プロジェクトに協力するもので、2004年12月から3年間に亘り実施され、日本では旅行業界などの民間セクターが中心となり支援を行なう任意団体も新たに発足する予定です。

メルコスール4ケ国現地サイドも政府観光庁や民間旅行業界の共同で、いわゆる両国官民共同のプロジェクトとなります。

日本国内での活動内容は、本年4月にメルコスール観光振興事務局を東京に開設し、観光フェアやセミナー、イベントの参加、旅行業界向けの商品化マニュアルの作成、（現地旅行サイドが素材を提供する）日本市場向けの観光商品の開発、（今後4ヶ国の観光分野で中核となる）官民の人材やサービス要員の育成などを実施します。

また、開設済のホームページなどを通じて4ヶ国の観光情報を旅行業界はもとより一般消費者にも広めます。

**観光は国際協力である；**

旅行を通じて異文化を知ることは相互理解に繋がるのは勿論のこと観光受入国に新たな経済効果を生み出すことは言うまでもありません。

南米に広大な土地を有するメルコスール地域は食料、鉱業、エネルギー分野などの自然資源に富み、ブラジルを主体に多くの日系移民（約130万人）が生活しています。

また、現在開催中の愛知万博での世界各国のパビリオンでも見られる様に、観光は関連フェアやセミナーにて受入国の料理や飲食品を主体とする産品とのセットで紹介される機会が多く、今後は環境・エネルギー分野との関連性も深まることより、将来的には文化交流のみならず同地域との経済・通商関係の拡大にも繋がります。

**メルコスール観光市場とは（JICA パンフレットからの抜粋）；**

南米は距離的ハンデイ（アクセス時間）に加え、治安問題、言語、情報不足などの理由で日本人が旅行し難い地域であります。

2002年のメルコスール向け日本人旅行者数はブラジル約4万人、アルゼンチン約1万人、パラグアイ・ウルグアイは各約2千人、合計約5.5万人で、新興観光国のニュージーランド約15万人、アフリカ3ヶ国（エジプト、南アフリカ、モロッコ）約13万人と比べてもまだまだ未熟な市場であることが分かります。

然しながら、2003年に開催されたJATA世界旅行博会場での来場者アンケートによればメルコスールへの日本人旅行希望者の割合はブラジル、アルゼンチンが約90%、パラグアイ、ウルグアイが70%近くにのぼりました。

旅行者の多様化が進み、新素材の開発が課題となっている旅行業界にとって開拓の余地が充分に残されています。4カ国でのエコ・ツーリズム（イグアスの滝、パタゴニア氷河、パンタナール湿原地帯などの大自然）、スポーツ（本場の南米サッカー）、ラテン・カルチャー

（カーニバル、タンゴ、フォルクローレ、アルパなど）、ロング・ステイ（ガウチョ体験、ダンス・レッスン、スペイン語研修など）に準加盟国ペルーの世界遺産（クスコ・マチュピチュ）が加われば商品化に向けたテーマや切り口も豊富で多様なメルコスールは今後さらなる成長が期待されます。

**現地「多国間調整役」の苦労（筆者の体験より）**

ここで、筆者のメルコスール並びに本プロジェクトとのかかわりについて述べさせていただきたいと思います。筆者のメルコスール地域との付き合いは1965年に某商社の駐在員としてアルゼンチンに赴任して以来継続して40年になります。

アルゼンチンには3度に亘り18年間駐在しましたが、その間パラグアイ、ウルグアイは業務テリトリーであったので長期出張も含め頻繁に赴き、また、上記の5ケ国の観光地はパンタナールを除き総て訪れました。

さらに、本社帰任後もJICAアルゼンチン経済開発調査（通称「大来第二次調査」）に参加、続いて日本・チリ修好百周年、日本・アルゼンチン修好百周年両事業委員会の事務局長を務め、退職後も現職の大来財団日本評議委員会事務局長として毎年アルゼンチン、ブラジル、チリを歴訪しましたが、2002年から2年間JICAのシニア海外ボランテイアとしてアルゼンチン大来財団に配属され、そこで本プロジェクトに出合った次第です。

即ち、JICAは2002年にJICAアルゼンチン事務所に富永研一郎氏をJICA広域企画調査員（メルコスール協力）として派遣し本プロジェクトのプロモーションを開始しましたが、観光は日亜間の相互理解を目的とする大来財団活動のテーマの一つであったので、筆者は現地で富永氏との情報・意見交換を密としていました。

ここで筆者が強調したいのは、一口にメルコスール4ケ国といっても観光力のみならず国情、政治、経済規模、文化、商習慣などがことなる4ケ国を一つにまとめて事業をプロモートしスタートラインに立たせるまでのJICA現地代表の多国間調整の手間と苦労は大変なものであったということです。

4ケ国は半年毎の輪番制で議長国を定め運営していますが、多国間調整業務はラテン民族の最も不得意とするところで、物事を極めるに際し議長国に話すだけではらちがあかず、富永氏が都度4ケ国を廻って自ら調整をせねばなりません。毎月出張の連続で（メキシコの歌のタイトルでも知られる）スペイン語のバガボンド（放浪者）生活を強いられます。

現地駐在を長く勤めた筆者は筆舌し難い現場の苦労が身にしみて分かります。

本プロジェクトは約2年間に亘るプロモーションを経て、日本での観光振興事務所開設と言うスタートラインに漕ぎ着けたものですが、華やかな開所式やパーテイーの裏にかかる長期に亘る現場の苦労があることを是非会員・読者の方々に知っていただきたい次第です。

最後になりますが、大来財団日本評議委員会は2004年10月に「日本メルコスール・フォーラム」を発足させ、隔月ベースで産官学の関係者によるメルコスール関連の情報・意見交換会を米州開発銀行（IDB）駐日事務所会議室に於いて開催しております。

当会は同フォーラムを通じスタートラインに立った本観光振興プロジェクトにも積極的に協力する所存です。本稿は当会の活動を紹介するのが意図ではありませんので、何れ次の機会に紹介させていただきたいと思っております。

（さいき　しげじ、当協会理事
大来財団日本評議委員会事務局長）

*新事務所と日本人スタッフ*

**編集者よりの御礼**

フロントページの版画は前回45号に続き版画大家の星野美智子さんのご好意により描いていただいた作品を使用させていただきました。

末尾ながら、厚く御礼申し上げます。

# Resumen en castellano

por Irene Gashu

**Expo Aichi Pabellón de Argentina (p. 1)**

por Junichi Toyoda

Del 25 de marzo al 25 de septiembre se está realizando la Expo Aichi. En el pabellón argentino se proyecta cada hora un cortometraje sobre la naturaleza y la cultura del país, seguido por un espectáculo de tango en vivo con Pablo y Noelia. Gusta mucho al público ya que ninguno de los otros pabellones ofrece una atracción similar. En el 11 de julio se celebrará el "Dia de Argentina".

**Situación económica de Argentina (p. 2)**

por Shinichiro Kobayashi

(1) Hay grupos ganadores y grupos perdedores en la crisis económica de diciembre de 2001. (2) A los tenedores de bonos argentinos impagos (8.183.600.000 dólares) se les ofreció el canje con 3 tipos de bonos nuevos. Tenedores por un valor de 1.951.800.000 dólares no hicieron el canje propuesto. (3) Los índices macroeconómicos son buenos pero para crear un mercado atractivo para los inversores y lograr un crecimiento sostenido hay que encontrar soluciones a numerosos problemas.

**Tango Regreso a lo tradicional (p. 4)**

por Masayo Tanimoto y Hideto Nishimura

Quizás como una reacción frente a la globalización del tango, están surgiendo grupos nuevos que marcan un regreso a lo tradicional. Un caso digno de mención es la Orquesta Escuela de Tango que permite a sus estudiantes tocar en una orquesta.

Nota del editor: Los interesados pueden visitar el sitio de la autora de este artículo: http://www.tanimon.com.ar/

**Folklore Cosquín 2005 (p. 6)**

por Tetsuo Sato

Mi primer encuentro con el folklore fue en 1999, cuando visité el Festival de Cosquín. Este año, tuve la suerte de asistir nuevamente a este acontecimiento tan emocionante. Una semana antes, tuvo lugar el Pre Cosquín que da oportunidad a artistas talentosos pero desconocidos para que actúen en el Festival. Muchos artistas han alcanzado la fama después de ganar el Pre-Cosquín. Además, en este viaje, disfruté muchísimo de las peñas. Fui todas las noches y bailé durante horas.

**Vamos adelante Argentina! (p. 7)**

por Yasuhisa Teramoto

Hace 7 años que resido en Argentina. Creo que este país se está esforzando para resolver el problema de la deuda pública. Es necesario que los líderes ancianos que han perjudicado al país den cabida a los jóvenes. Si éstos comienzan a actuar, en menos de 10 años habrá una Argentina nueva. Un ejemplo es "NEC Argentina" donde la edad promedio de sus empleados es de 28 años. Gracias a ellos, se pudo firmar con la provincia de San Luis un contrato por 3.500 millones de yenes.

**La Guerra Ruso-Japonesa y Argentina (p. 9)**

por Isao Kawasaki

Hace más de 100 años, Argentina y Chile firmaron un acuerdo de desarme por lo que Argentina se comprometió a deshacerse de dos buques que había encargado a un astillero italiano. Tanto Japón como Rusia, que se encontraban en guerra, quisieron comprarlos. Al final, fueron adquiridos por Japón. El entonces capitán de navío Manuel Domecq García redactó informes detallados. Se acaba de publicar el libro "Cien años desde la Guerra Ruso-Japonesa — Testimonio de un oficial naval argentino", preparado por la Asociación Nippo-Argentina.

**Que se repita la época de gloria del fútbol argentino (p. 10)**

por Yoshinori Kitayama

Los argentinos sufrieron una gran decepción en el Mundial de Japón-Corea 2002. Argentina logró el segundo puesto en la Copa América. En las Olimpíadas de Atenas 2004, ganó Argentina. Sorpresivamente, Bielsa renunció y fue reemplazado por José Pekerman. En las eliminatorias sudamericanas para el próximo Mundial, Argentina sigue primero. Todos los argentinos desean que se repita la época de gloria del 86 y los años 90.

**Inauguración de una oficina de turismo del Mercosur (p. 12)**

por Shigeji Saiki

En abril de este año se inauguró una oficina de turismo del Mercosur en Ginza, Tokio y un sitio en Internet en idioma japonés, gracias a la intensa labor de JICA junto con el sector público y privado relacionado al turismo de los 4 países miembros del Mercosur: Argentina, Brasil, Paraguay y Uruguay.

---

**Nota del editor:** la autora del Resumen en castellano, Irene Gashu, realizará una exhibición individual de fotos en "Fuji Photo Salon" de Ginza, del 7 al 13 de octubre. El tema de la exhibición será los festivales de Papúa Nueva Guinea y los retratos de su gente. Entrada gratuita.

**編集者よりのお知らせ**

スペイン語のサマリー（Resumen en castellano）を作ってくださった当協会理事のイレーネ賀集さんが10月7日から13日まで東京数寄屋橋の「銀座富士フォトサロン」で写真の個展を開く。

「私が訪れた世界73カ国の中で最も自然が破壊されないで残っている国、最も人々が親切な国パプアニューギニア」のお祭りを題材に、現地の人たちの生き生きとした表情を3年がかりで撮った35点を出品する。

入場無料。

## 編集後記

本会報の編集は前編集長　河崎常務理事の後を受けた斉木理事を新編集長とし下記当協会の役員・会員有志より成る編集チームを結成して行いました。

編集長：斉木　茂治理事

役員メンバー：豊田　潤一常務理事、高安　宏治理事

会員メンバー：河野　英嗣（東京三菱銀行）、渡部千秋（三菱商事グループ）、藤田　悟郎（日本水産）、河野　朗子（個人会員）

会報の内容も会員諸氏の興味が深いと思われるタンゴ・フォロクローレ、サッカー、ワイン、観光等の文化・スポーツ関連テーマを充実させた積もりです。

また、近々当協会のホームページに掲示板（投稿欄）を設けますので、会員諸氏より会報内容に対するご感想・希望・意見等の投稿をいただき、次回以降の会報に反映させたき所存です。

新編集チームを宜しくお願い申し上げます。

編集長記

## アルゼンチン情勢
### —政治・経済の主な出来事—

これまで、塩見憲一理事（東京リサーチ・インターナショナル研究理事）が担当して、アルゼンチンでの発表や統計から、政治・経済の主な動きをピックアップし、四半期毎に「ドキュメント」としてまとめて会報に掲載してきました。

会報が年2回の発行になりましたので、このドキュメントは半年分のまとめになり、分量も増えることになりました。そこで、今回は、この「ドキュメント」を別刷りにしました。

最も需要が高いと思われる法人会員には、会報に添付してお送りします。個人正会員、賛助会員の方は、ご希望の旨を事務局までご連絡頂ければ、お送り致します。

Eメールでの送付が可能ですので、Eメール送付をご希望の向きは、Eメール・アドレスをご連絡下さい。

この「ドキュメント」は、塩見理事の前任者、小林晋一郎理事執筆のころから数年間、途切れることなく続いており、データは、協会事務局で保管しています。将来、貴重な集積データになるものと思われます。

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

日本アルゼンチン協会会報　第46号
2005年5月20日発行

編集長　斉木　茂治

編集発行　社団法人　日本アルゼンチン協会
105-0004　東京都港区新橋1-17-1
新幸ビル
電話：03-3501-4684
FAX：03-3595-3932
Email：argentina@nifty.com
URL：http://www.argentina.jp

印刷　株式会社　イデア・インスティテュート